

第1章 戦場

東京での終戦

一番つらかったのは空腹〜B29に負けた日本

登坂正夫さんのお話から

○徴兵検査 徴兵適齢の男子に、兵役の適否を身体・身上にわたって検査すること。

昭和十七年（一九四二年）のことです。二十歳になると、男子は必ず兵隊に行くための徴兵検査を受けました。私は、「甲種合格」と言われ、必ず兵隊に行かなければなりませんでした。私がいやだと思っても、許されません。戦争の真つ最中です。鉄砲の弾が飛んできたり、爆弾を落とされれば、死ぬことになりました。兵隊に行くと決まった時、私が死んでしまえば何もなくなってしまう、せめて何かを残したいと考えました。そこで、つめを切って、半紙に包んで封筒に入れて、仏壇の下にそっと入れておきました。もう帰れないかもしれない、死ぬかもしれないという覚悟で兵隊に行ったのです。昔はみんなそうでした。兵隊に行くことは戦争に行くこと、戦争に行くことは死を覚悟することです。兵隊に行くことは、お国のために働くことだというので、村の人みんなが集まって、日の丸の旗を振って私を送ってくれました。昭和十八年四月十日に、千葉県にある陸軍高射学校に入隊しました。昔は、北海道と千葉はとても遠かったのです。今は、飛行機で数時間で行けると思いますが、私は十日に軍隊に入るために、家を七日に出発し、九日まで三日がかりでようやく千葉に着きました。すぐに身体検査を受け、それぞれの任務に分かれた後、支給された軍服を着ました。そして、兵舎に連れられ、昼ご飯の用意がされているのを見て、私たちが初めて兵隊に入ったというお祝いで、赤飯を炊いてごちそうしてくれたのだと思いました。ところが、食べて赤飯だと思ったものは、コーリャン飯と呼ばれるものでびっくりしました。コーリャンとは中国でとれるきびの赤い実のことで、軍隊で働く馬に食べさせるために、輸入した穀物です。戦争が続いて食物が不足

○コーリャン 中国産の背の高いきびの一つ

○編隊 飛行機などが組
んで、隊形を整えること。
また、その隊形。

してきたので、その馬の餌を兵隊が食べていたのです。私にとって、のどが通らない思いで食べたコーリヤン飯が初めての兵隊の食事でした。

それから戦争はまだまだ続き、ますます食料が不足してきました。コーリヤン飯さえも食べられなくなり、さらにまずいもので、量も減らされました。私は通信という兵隊でしたが、死ぬほどつらく厳しい訓練が毎日続きました。おなかがすいてたまらなくなり、夜中に目が覚めてしまいます。そんなときには、置いてあった塩をつまんで、トイレに行くふりをして炊事場で塩水をつくって飲んだことが何回もありました。兵隊に行つて、厳しい訓練をして、ほつぺたをたたかれたりして、つらいこともたくさんありました。一番つらかったのは、やはりおなかがすいたことです。思い出したくもない、つらい思い出でした。

やがて、B 29の空襲が始まりました。昼は六、七機が編隊で爆弾を落としていきます。夜には一機来て、爆弾を落として燃え上がり、また一機来ては、燃えていないところをねらって爆弾を落としていきま



旗を振られて出征

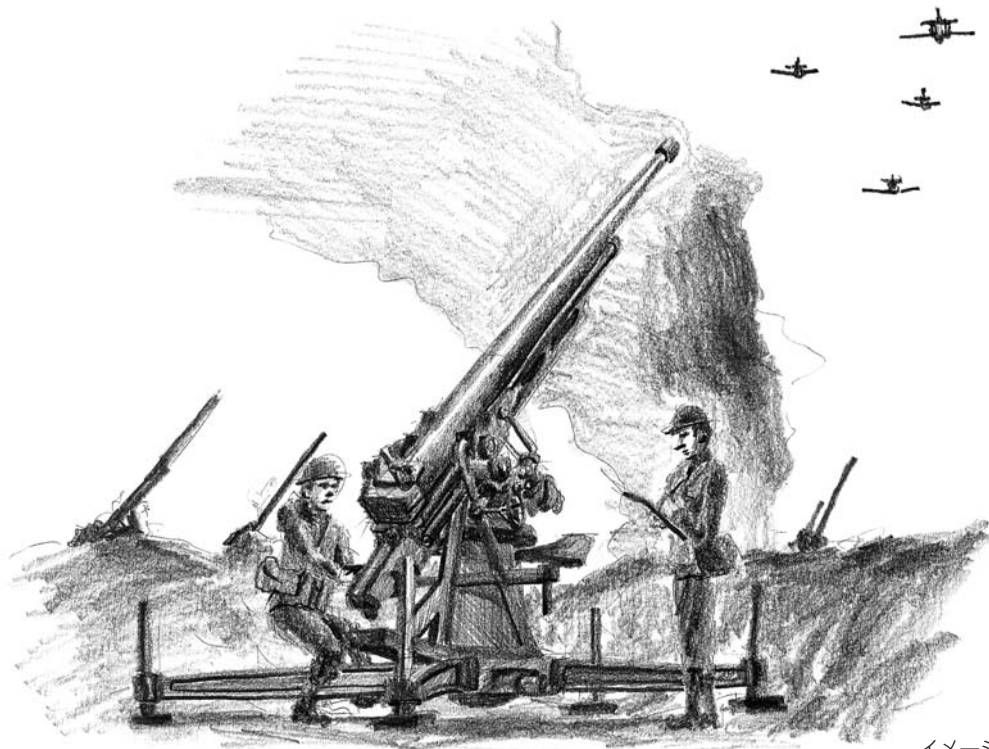
イメージ図

○焼夷弾 火災を引き起
こすために作られた爆
弾。

○要塞 外敵を防御・海
岸などを築造する堅固な
建造物。とりで。

※B29は翼長四十三メ
ートル、全長三十メー
トルもある体育館なみの大き
さで、多数の爆弾を積み
込んで長距離飛行がで
きる。

す。焼夷弾、爆弾のほかにも照明弾というものも落としました。ほんの数秒だったので、下に落ちていく針が拾えるほどの明るさでした。私は、B29に向かって、ずいぶん高射砲を撃ちました。照空灯という明るい電灯を敵の飛行機に当て、それに向かって、高射砲がぼんぼんと火を吹くのです。まるで花火大会のような空襲が毎日のように続きました。しかし、高射砲の弾はB29には届かず、日本の戦闘機が行って戦うにも、酸素マスクや断熱服もないといったありさまでした。日本の飛行機には対等に戦う力などありませんでした。日本はB29によって滅ぼされた、負けたと言ってもいいのではないかと思えます。長崎、広島に原爆を落としたのも、三月十日の東京大空襲も、B29によるものでした。B29はアメリカの「空の要塞」と言われていました。その後も空襲が続き、いよいよ本土決戦を覚悟して高射学校は解散し、天皇ご一家が住んでいる宮城の周りを取り囲んで警備し、終戦までその守りについていました。



イメージ図

高射砲による砲撃

○武装解除 降伏者・捕虜などに対してその兵器を強制的に取り上げること。

○復員命令 戦時の体制にある軍隊を平時の体制に復し、兵員の召集を解くこと。また、召集を解かれた兵士が帰郷すること。(復員↑↓動員)
○餓死 食べ物がなく、うえて死ぬこと。

昭和二十年八月十五日、終戦の日が来ました。後楽園球場という野球場（現在の東京ドーム）で、戦争に使った私たちの兵器を全部そろえてアメリカに渡す、武装解除が行われました。そうして、戦争が終わりました。九月四日に復員命令があり、富良野に帰ることになりましたが、手に持たされた食糧は飯ごうに二食分の米と水筒の水だけでした。また、三日かけて家に帰るのにたったそれだけです。何とか家にたどり着くと、富良野の家では水田をつくっていたので、米の飯がありました。おなかがすいていて、今までにこんなにおいしい米の飯は食べたことがないと思うほどでした。おかずは何もなくていいと思って、何杯おかわりしたかわからないくらいでした。私は、戦争が終わって本当に家に帰ってきたのです。しかし、上野駅で汽車に乗ろうと地下道を歩いていたら、食べ物が無くて餓死寸前、立つこともできず何をしても生きられないだろうという人や、家も親も失った子どもたちをたくさん目の当たりにしました。出歩く人が持つ弁当を分けてもらって、なんとか命をつないでいたという状況です。こういう時代がしばらく続きました。

そういうたいへんな状況を生んだ戦争をしたということ、みなさんはしっかりと覚えていてください。みなさんは、毎日とても幸せです。何でもほしい物があり、食べたいものをおなかいっぱい食べられます。ところが、戦争中は食べられなくておなか膨れて餓死してしまう、かわいそうな子どもがたくさんいました。みなさんが幸せなのは、平和が続いているからです。二度と戦争が起きないように平和を大事にしましょう。

DATA

平成20年度北区平和事業

聴き取り

- ・平成20年8月12日
- ・幌北児童会館



登坂正夫(とさか・まさお)さん

- ・大正11年(1922年)生まれ
- ・札幌市北区在住

一番つらかったのは空腹、B29に負けた日本